

1940年代後半の鞍山日本人社会に関する歴史年表

——『鞍山回想録石川義助先生を憶う』,
『鉄都鞍山の回顧』を中心に——

松 本 俊 郎

I 年表資料の特徴について

(1) 鞍山戦後情勢と瀬尾メモランダム

本稿では「満洲国」の崩壊以後も鞍山に取り残され、波乱の人生を体験した日本人居留民の日記資料に基づいて、1940年代後半の鞍山情勢について年表資料を作成してみたい。

1940年代後半の昭和製鋼所（満洲製鉄鞍山本社，鞍山鋼鉄公司）については、松本俊郎 [1995abc]，Matsumoto [1996] の中で戦争被害と戦後復興の状況をできる限り具体的に跡づけた。その結果，当該施設の存在は，社会主義中国の経済建設にとって無視することのできない初期条件の一つとなっていたことが明らかになった。その過程で作成した松本 [1995d] は，米国ポーレー調査団の報告書に収録された瀬尾の英文メモランダムを翻訳し，満蒙同胞援護会編 [1962]，解・張編 [1984]，内閣総理大臣官房調査室監修 [1956ab] 等の既存資料と対照させながら，一部の記載内容について訂正と補足を行い，当該情勢の展開について解説を加えたものであった。

瀬尾喜代三は，昭和製鋼所において鋼片工場，圧延工場の工場長職を経験し（満洲重工業開発株式会社 [1939] 18ページ），1944年の段階では生鉄部，

製鋼部，化工部，採鉱部という枢要四部を統括する作業局の局長兼理事として満洲製鉄株式会社の重職に就いていた（解・張編〔1984〕438ページ）。瀬尾はその専門知識を認められてソ連軍，八路軍，国府軍から被害調査，復旧計画の作成に協力を求められたが，1946年6月にはポーレー調査団からも命令を受けて製鉄所の被害状況に関する報告書を作成した。昭和製鋼所の最上層の管理職にあった瀬尾喜代三は，敗戦直後の工場設備がどのような状態にあり，またそれがソ連軍によっていかに取り扱われたかについて，詳細な観察を行うことができたのである。

しかし，瀬尾の回想メモは昭和製鋼所に直接に関わる問題に記述が集中し，鞍山の日本人社会一般そして政治情勢全体については言及が限られていた。鞍山市域の社会状況とりわけ軍事情勢の急激な展開に振り回された日本人居留民の生活状況は，製鋼所内で発生した諸事件と深く連動していた。本稿では工場設備の復旧速度を規定した昭和製鋼所の周辺事情を補足すべく，日本人居留民の日記資料を紹介し，1940年代の鞍山の社会状況に関わる年表資料を作成してみたい。

瀬尾メモランダムを補足するための資料としては(a)敗戦直後の鞍山生活を体験した日本人居留民の記録・回想と，(b)中華人民共和国の建国を達成し，社会主義中国の建設を追求してきた中国共産党の側からの編纂歴史資料を利用することができる。本稿ではまず前者(a)にあたる資料として，池尻半太郎「鞍山日記」（聞人会編〔1969〕所収）と安田一郎「安田一郎日記抜粋」（満洲製鉄鉄友会編〔1957〕所収）を取り上げる。敗戦直後の鞍山に関わる引揚者の記録としては，この他にも友清高志〔1992〕によって岩崎茂『鞍山終戦前後』という回顧資料の存在が指摘されているが（266ページ），筆者はこの著作について未見である。

中国共産党の見方を反映した後者(b)に属する資料については，1980年代後半になってから急速に整理と復刻が進み，1990年代に入ってから出版は続いている。収録されている各種の資料とそれについての解説，分析は，狭義

の軍事情勢ばかりでなく、科学技術政策や製鉄技術の進展等について貴重な情報を教えてくれる。具体的な内容については、機会を改めて紹介する。

(a), (b)に含まれる諸資料は、いずれも1940年代後半以降の鞍山を記述の対象としており、相互の間で、また瀬尾メモランダムとも一部内容に重複がある。しかし、作成者が社会的、政治的に立場を異にしていたことを反映して、各資料の中で取り上げられた事件の重点はかなり相違していた。諸資料は戦後の鞍山の全体情勢を把握するうえで互いに補完的な関係を持ち、それぞれ貴重な価値を持っている。

(2) 鞍山日本人居留民の回想資料と戦後情勢

傀儡国家「満洲国」が瓦解し、支配民族（指導層）から敗戦国民へと立場が逆転した日本人居留民は、ソ連軍、八路軍、国府軍そして一般中国人から戦犯あるいは侵略者として追及を受け、時には度を越えた迫害を受けることもあった。多くの日本人居留民はそうした中で生命の危険をとまなう悲惨な生活を強いられた。中国人に対する民族支配、階級支配の前面に立ち、それゆえ彼らの憎しみの対象となっていた軍人や権力者たちは、特に厳しい反撃を蒙った（年表の1945年12月22日、聞人会編〔1969〕23、26、29ページ等を参照）。鞍山市内では中国人クーリーが「日本人の煉瓦業者や土建業者等、多数の苦力を使用していた有力者に対して、日頃の不満、うっぶんを晴らすのは、この時とばかり、多数を頼み、集団で家屋や事務所に侵入し、器物を持出し、窓や戸扉を破り、乱暴狼藉を働く事件が続発した」（聞人会編〔1969〕19ページ）という。

異民族支配の直接の遂行者であったともいえるこうした日本人ばかりでなく、日本人居留民は全体として治安の悪化に苦しめられ、特にソ連兵による婦女子の提供要求、ソ連軍、八路軍、国民党軍その他武装勢力による金品・物品の請求等に悩まされ続けた（1945年8月24日、9月9日、29日、10月7日、20日、23日、31日、11月1日、5日、11日、15日、21日、30日、12月5

日、25日、10日、22日、28日、1946年2月8日、20日、3月13日、4月30日、5月28日等の項を参照)。鞍山市音羽区の区長として各勢力との折衝を行った柴田四郎は、この間の事情について「一番困ったのは物資の供出ですね、朝から晩まで何カ月間もね、地下足袋とか、箸何本に到る迄、区民にはもう無い無いと云われるあの時は区長も仲々つらかった」(満洲製鉄鉄友会編[1957]165ページ)と回顧した。

この他にも日本人同士が報償金を目当てに密告を行ったり(聞人会編[1969]127ページ)、脱走日本兵が日本人に対して窃盗を働くといったような(聞人会編[1969]57-60ページ、満洲製鉄鉄友会編[1957]168ページ等)、戦時中とは様変わり的事件が多発した。恐怖をともなった心労と栄養失調が重なる中で、老人をはじめとする体力の乏しい者たちの死亡が相継いだ(聞人会編[1969]28、37ページ)。

1940年代後半の鞍山の軍事情勢は、文字通りの転変を繰り返した(松本俊郎[1995abc], Matsumoto[1996])。その過程で日本人居留民を取り巻く環境は極度に緊迫化し、彼らは生活を翻弄され続けていたのである。こうした鞍山の混乱状態は、それでも新京(長春)、奉天(瀋陽)、哈爾濱等に比べるならば相対的には軽度であって、被害者も難民も「少なかった」のだという(満洲製鉄鉄友会編[1957]175ページ)。

戦前の日本が行った満洲支配の侵略性や野蛮性を抜きにして日本人居留民を襲った災禍だけを取り上げ、この時代の特徴を論ずることには問題がある。しかしまた、戦後の混乱の中で起こった様々な悲劇を一括してある種の「当然の報い」として片づけ、批判すべき歴史の側面に縋い交ぜにしてしまうとすれば、それはそれで適当ではない。一つの時代と社会に対するそうした歴史評価の姿勢には、資料の発掘と考証を進める上で求められるはずの客観性が欠けているからである。

中国東北からの引揚者の問題は、マスコミ報道、テレビドラマ、小説あるいは回想記の中で、枚挙にいとまがないほど繰り返し取り上げられてきた。

しかし、植民地問題を分析したいいわゆる歴史学の書籍、論文の中では、日本人居留民の不幸な体験はこれまであまり検証されてこなかった。鞍山一帯に地域を限定するというならば、歴史学の文献、論文はもちろんのこと、一般的にも敗戦直後の事情はほとんど紹介されてこなかった。満蒙同胞援護会編〔1962〕には、一部に鞍山情勢についての叙述があるが、本格的に焦点を絞った記述ではない。本稿では聞人会編〔1969〕と満洲製鉄友会編〔1957〕に収録された二つの日記資料を取り上げるが、管見の限りでは、前者については取り上げられたことがなく、後者についても引揚者問題にかかわってはほとんど利用されてこなかった。

こうした事情を考慮すると鞍山関係者からの聞き取り調査を基にして執筆された友清高志〔1987, 92〕は貴重である。友清〔1987, 92〕はノンフィクションの歴史小説という性格を持っており、本稿とは記述の手法が異なっている。しかし、友清氏の二つの労作は1940年代の鞍山地域の騒然とした時代状況を活写しており、当該時期の鞍山の社会状態をイメージする上でたいへん参考になる。

(3) 池尻半太郎「鞍山日記」について

池尻半太郎の「鞍山日記」が収録された聞人会編〔1969〕は、鞍山の内科小児科医であった石川義助の追悼集である。未亡人石川ふじよを含む鞍山会のメンバー15人が、石川の生前を偲んで寄稿した。石川義助は1890年に栃木県に生まれ、1914年に金沢医学専門学校を卒業すると、渡満して満鉄吉林病院に勤めた。石川は、その後、1917年に立山に医院を開業し、1919年に鞍山市内へ転居してからは敗戦にいたるまで同地で石川病院を営んだ。戦後の混乱期には鞍山日本人居留民会会長、鞍山市日僑善後連絡処主任の任に就き、極限状態の中で周囲の日本人たちの心の支えとなった。帰国後は引揚者の親睦をはかるべく鞍山会の創立者の一人となり、会長職にも長く就いて活動を推進した。鞍山関係者の石川に対する信望は厚かったが、1964年に彼は74歳

で永眠した。聞人会編〔1969〕には、石川義助に対する関係者たちの感謝の気持ち、生々しい記憶とともに回想されている。

石川は医者として日本人居留民や八路軍、国民党軍の傷病兵の診療に当たったばかりでなく、居留民会会長として逮捕された日本人の釈放運動に奔走し、軍人や脱走日本兵をかくまうことに対してもたびたび命がけの行動をとった（聞人会編〔1969〕9—11, 33, 54—6, 94—100ページ）。

石川の居留民会会長職への就任は、それ自体が一つの捨て身の行動であった。日本人会の役員は、1945年11月初旬に鞍山治安維持会（8月下旬発足。後述するように満蒙同胞援護会編〔1962〕の時期区分では第1期にあたる）の上田利三郎会長（正確には元会長）がソ連軍によって逮捕され⁽¹⁾、11月下旬から12月初旬にかけては治安維持会の後身にあたる日本人僑民会（同上、第2期）の岸本綾夫顧問と矢野耕治会長が八路軍に逮捕された。石川が居留民会会長への就任を乞われた1946年4月の直前にあたる同年2—3月には、日本人僑民会（同上、第3期）の岩満三七男会長、朝慶一郎副会長他関係者数名が八路軍によって次々と逮捕され、その多くが銃殺の刑に処せられた（年表ならびに松本〔1995d〕230ページを参照）。石川ふじよは、夫義助の会長就任に幾度も反対したという（聞人会編〔1969〕52ページ）。

石川が会長職に就任した1946年春までに日本人会は数度にわたって組織の再生をはかり、名称の変更と後任役員の選出を繰り返していた。歴代の会長は例外なしに逮捕され、その中には極刑を科せられる者もいた。このため日本人会の役員とりわけ会長職に就任することに対しては、居留民の間にためらいの意識が生じていたのである（松本〔1995d〕224, 230—1ページ）。

「鞍山日記」の作成者である池尻半太郎は、遊楽館（映画館）の経営者であった。1945年10月から翌年2月にかけては日本人僑民会の保衛班長として、武装勢力との折衝や治安の確保に取り組むなど、政治の第一線で危険な任務を遂行した（聞人会編〔1969〕25, 27, 29ページ）。友清〔1987, 92〕によれば、池尻半太郎は青年期に山東省の馬賊、大攪把金雲鳳と交流があり、

金の部隊の別働隊であった北満の馬賊集団にあって参謀を務めていたという（〔1987〕206—210ページ，〔1992〕272ページ）。

池尻は1946年2月10日に僑民会の幹部として八路軍により逮捕され死刑を宣せられたが、刑の執行直前に警備の任に就いていた顔見知りの兵士の力添えで拘禁場所から逃れ出ることに成功した。不思議な人の巡り合わせというものを感じさせられるこの間の緊迫した経緯については、池尻の回想と友清高志の取材に詳しい（聞人会編〔1969〕32—4ページ，友清〔1987〕211—213ページ，同〔1992〕273—4ページ）。

八路軍の池尻に対する追及は、監禁場所からの脱走以後も執拗に続けられた。池尻の緊張した逃亡生活は、7月下旬に葫蘆島で日本への帰国船に乗り込むまで半年近くも継続した（聞人会編〔1969〕39，94ページ）。彼の帰国は「九死に一生」という形容がふさわしい、奇跡的なものであった。

このように池尻半太郎の人生は、鞍山からの引揚者の中にあって特に波乱に満ちており、希少な体験に裏打ちされた「鞍山日記」の記述には活き活きとしたものがある。

（4）安田一郎「安田一郎日記抜粋」について

安田一郎は満洲製鉄鞍山本社総務部庶務課長を務めたが（満洲製鉄鉄友会編〔1957〕153ページ），その経歴についてははっきりつかめていない。「安田一郎日記抜粋」は本来の『安田一郎日記』から「終戦後引揚まで」部分を抜粋したもので，同資料は満洲製鉄鉄友会編〔1957〕の末尾に付録として収録されている。

満洲製鉄鉄友会編〔1957〕が出版されたきっかけは，満蒙同胞援護会が満蒙同胞援護会編〔1962〕の刊行に先がけて，手記や記録，座談会，懇談会の速記録など引揚資料の蒐集を開始したことにあった（満洲製鉄鉄友会編〔1957〕3—4ページ，満蒙同胞援護会編〔1969〕あとがき）。援護会の取り組みに刺激されて鉄友会で回想録をまとめるために音頭を取ったのは，元満

洲製鉄原料局長兼理事秋田豊作（解・張編〔1984〕438ページ）であった。編集の実務はかつて満洲製鉄経理部に勤務し（満洲重工業〔1939〕18ページ）、戦後は同社の特別服務部長として社員の生活防衛に駆け回った西一幸であった（11月27日、28日の項ならびに松本〔1995 d〕226ページを参照）。

満洲製鉄鉄友会編〔1957〕は満洲製鉄（昭和製鋼所）ならびに鞍山市についての通史であるが、同書には上記の「安田一郎日記抜粋」の他、鞍山からの引揚者10名による回想の座談記が掲載された。座談会のメンバーの一人は、石川義助であった。

「安田一郎日記抜粋」に記述された内容は、瀬尾喜代三のメモランダムのとそれに比べると、日常的な出来事への目配りに特色がある。瀬尾メモランダムがソ連軍や八路軍との折衝経緯やソ連軍による製鉄所からの資材の持ち出し状況を詳細に記録しているのに対して、「安田一郎日記抜粋」は降伏情報の把握（1945年8月30日）⁽²⁾、標準時の変更（9月30日）、道路の通交則の変更（10月18日、10月20日）、国防色服の着用禁止（1946年2月18日）、東北券の流通（3月16日）、地名・町名の改称（4月4日、21日）、水道電気の破壊・復旧（3月15日、23日、5月8日、10日）といった、身近な生活上の問題に対する言及が多かったのである。安田一郎と瀬尾喜代三の満洲製鉄会社におけるポストの違いが、こうした視点の違いに反映されたものと思われる。

（5）留意事項

この年表資料を作成するにあたって留意した二つの事項について、補足しておく。補足の第1は、各項目の最後に付された符号と日記資料の信頼性に関することである。二つの日記資料から年表に転記された記述の間には、日付や使用された漢字などにおいて、一部に食い違いが見られた。いずれの内容が正確かを期し難い場合には、両方を併記した。各項の末尾に付された記号は、この点を明示するためのものである。池尻半太郎「鞍山日記」に基づ

く記述には（IH）を，安田一郎「安田一郎日記抜粋」に基づく記述には（Y）を付記してある。

「鞍山日記」はタイトルに「日記」の一語が冠せられているものの，池尻半太郎が戦後になって日本国内で執筆した，実質的には回想文章というべき資料であった。池尻が本来の日記を付けていたかどうか，回想録をまとめるにあたってその日記を参考としたかどうかについて，資料中には説明がない。「鞍山日記」は，聞人会編〔1969〕の刊行に向けて，池尻半太郎が新たに書き下した文章であったと思われる。

他方，「安田一郎日記抜粋」は，安田が鞍山の地で諸事件が発生した折りにリアルタイムで書き付けていた『安田一郎日記』から，戦後に関わる部分を抜き出したものであった。したがって後者の記述は前者のそれよりも正確であるとする考えも，あるいは成り立つかもしれない。しかしながら，池尻半太郎「鞍山日記」の内容については，鞍山会の関係者たちによって出版前にチェックと補正が相当程度になされていたと推察される。「鞍山日記」の記述には「安田一太郎日記抜粋」のそれとは別の意味で，信頼性の上での強みがあるといえよう。

第2の補足は，表記の方法についてである。辛酸をなめた引揚者たちが各々の体験を背負って書いた回顧資料の中には，もっとも厳しく戦犯追及を行い，また内戦に最終的に勝利したことからもっとも長期にわたって残留日本人を支配することになった八路軍に対する反発が，言葉遣いや視角設定の上にしばしば現れていた。本稿が取り上げた聞人会編〔1969〕と満洲製鉄鉄友会編〔1957〕の中にも，そうした表現箇所は散見された。原著者たちが使用した感情的な表現にはそれ自体に歴史的な意味があるともいえようが，ここでは歴史年表の作成に必要な事実の採録に徹することを心がけて，適宜，原文の言い回しを改めた。

(6) 作成歴史年表の特色と新事実

最後に作成された年表が新たな歴史事実として何を教えてくれるのかについて、触れておく。二つの日記資料の整理を通して判明した新事実については、これまでの記述の中でもいくつか触れてきた。とりわけ注目に値するのは日本人居留民会の動向に関する情報である。満蒙同胞援護会編〔1962〕によれば、鞍山の日本人会には次の五つの時期があった（311—2 ページ）。

第1期：治安維持会。1945年8月下旬設立。同年11月にソ連軍が会長（上田利三郎大佐）ならびに幹事（梅本前市長）を逮捕して解散。

第2期：日本人僑民会。設立日時不詳。12月5日に会長（矢野耕治）が逮捕され解散。

第3期：日本人僑民会。12月6日発会。1946年3月26日に八路軍が会長（岩満三七男）、副会長（朝慶一郎）、事務局長（鈴木兼介）を逮捕・銃殺して解散。

第4期：4月6日発会。解散日不詳。会長石川義助、副会長小野平八郎。

第5期：鞍山市日本人善後連絡処。主任石川義助、副主任小野平八郎、藤沼禧一郎、松原次郎。

このうち第1期については池尻半太郎「鞍山日記」の記述から、8月23日の発足と9月20日の解散という経緯が判明した。石川ふじよの回顧によれば、石川宅には8月15日の夜から「古い顔なじみの方が、二人、三人と家に集まり、…日本軍が武装解除されたら、その後の治安をどうするのか」（聞人会編〔1969〕44ページ）と、密談を進めていたという。

第2期について池尻半太郎「鞍山日記」は、治安維持会が解散された直後にあたる9月23日に日本人会を僑民会として再建しようという相談がまとまり、事務所が富士見通りの青年学校跡に開設されたと回顧した（年表ならびに聞人会編〔1969〕21ページ参照）。他方、「安田一郎日記抜粋」は、維持会

の解散を10月14日、僑民会の発足を10月17日と記録した（年表ならびに満洲製鉄鉄友会編〔1957〕181ページ参照）。これとは別に瀬尾喜代三は、日本人居留民会の自治活動が10月13日に始まったとポーレー調査団に報告した（松本〔1995 d〕223ページ）。3つの資料に記された僑民会の発足に関わる日付は、少しずつ違っている。しかし、いずれにせよ、日本人僑民会の互助活動の出発点は満蒙同胞援護会編〔1962〕が暗示した1945年11月下旬の時点（312ページ）よりもかなり早い段階にあったと推測される。

ソ連人、中国人との折衝に角が立ちかねない旧軍人を後陣にさげ一般民間人を前面に立てて自治組織を再編するという日本人僑民の敗戦状況に対する対応は、特に池尻の記憶に従うならば、迅速であったということになる。

第3期については、池尻半太郎「鞍山日記」によって11月22日に八路军が矢野耕治会長を逮捕し、市長命令によって岩満三七男が臨時の会長職に就いていたという一幕が判明した。

第4期から第5期については、5月19日の記述によって組織の移行経緯が明らかになった（池尻半太郎「鞍山日記」）。第4期、第5期については当該時期に居留民会の役員職にあった伊沢醇治（労務担当）と梶田正夫（経理担当、元満洲製鉄経理部主計課職員）が、聞人会編〔1969〕に回想文を寄せていた。両名はその中で副会長として隅野光世（満洲製鉄社員）、藤沼禧一郎（富士）、平尾康雄（鞍山商工公会常務理事）という3名の名前を列举した（126, 136—7ページ）。満蒙同胞会編〔1962〕では小野平八郎、藤沼禧一郎、松原次郎の3名が副会長であったとされており、「安田一郎日記抜粋」では小野平八郎の名前だけが挙げられた（4月6日の項を参照）。いずれの記述が正確なのかは判然としないが、伊沢、梶田両名の経歴から見て、この点に関しては聞人会編〔1969〕の記述が一番信憑性が高いように思われる。

「安田一郎日記抜粋」の中での記述ではないののだが、満洲製鉄鉄友会編〔1957〕にはこの他、敗戦前夜の鞍山において鞍山航空隊司令官今川一策少将、満洲製鉄理事長岸本綾夫陸軍大将、鞍山警備司令官上田利三郎陸軍大佐

の3名が敗戦間際に善後策を相談していた事実が記されていた。同書によれば、関東軍は8月11日に「鞍山市日本人老幼婦女子を南方へ疎開させよ」との通達を今川少将宛に発していたが、3名は思案の末に「万一の場合は鞍山市の全日本人をまとめ在鞍五千の駐屯日本兵に守らせて朝鮮に向かって難を避ける」という方針を固め、この通達を無視したという。日本人市長の自発的な勇退と中国人副市長の昇格、治安維持会の組織化（今川による現地独断の上田大佐の現役解任、治安維持会会長任命）といった矢継ぎ早の対応も、今川、岸本、上田の3名によって準備されたのだという（50ページ）。

こうした情報を整理すると、1945年8月から1946年夏にかけての混乱期、すなわち敗戦から帰国にいたるまでの鞍山日本人居留民会の動向は、おおむね把握することが可能となる。

ちなみに鞍山日本人会の役員人事の構成には、鞍山経済界において支配的な役割を演じていた昭和製鋼所の同会に対する影響力の強さが明瞭に現れていた。昭和製鋼所は、戦時中から鞍山商工公会の役員、職員（参事、会長、工業委員等）に複数の人員を派遣していたが（鞍山商工公会〔1944b〕）、戦後の日本人会においても引き続き社員を重要職に就任させていたのである。

Ⅱ 鞍山日本人社会の戦後情勢年表

1945年8月17日 鞍山警察署日本人署長、署員、全員行方不明。元保安科長張元保、署長に就任（IH）。

8月19日 立山で孫以下50余名、蜂起（IH）。

8月20日 石川義助の発案で市外居住の日本人に市内へ集合するよう伝達が出る（IH）。

8月22日 鞍山地方維持会成立。会長上田利三郎元鞍山警備司令・陸軍大佐（Y）。ソ連兵一個小隊、鞍山市外八家子西方に飛来。市内の軍倉庫、製鋼所倉庫を封印。満鉄各駅の主要ボ

ストがソ連兵に代わる（I H）。

- 8月23日 矢野耕治，石川義助の発案で鞍山日本人維持会，結成される（I H）。会長矢野耕治（製鋼所常務理事），委員岩瀧三七男（前市長），鈴木謙介（製鋼所監事），渡辺（遼鞍新聞支局長），石川義助（石川医院院長），菊池亀助（菊池窯業公司代表），末宗安吉（鞍山中央商事社長，鞍山劇場社長，満洲機械製氷会社社長），上田利三郎（元守備隊長陸軍大佐），坂本泰通（坂本組社長），朝慶一郎（元警務科長），野毛四郎（野毛商会代表社員，家具商組合長，大陸土建会社社長），三宅欣吾（近江屋ホテル代表社員，鞍山旅館業組合長），叶井貫一（叶井商会代表，煉瓦統制組合理事長，木材配給組合理事長），三浦源七（三浦商事社長，鞍山無尽社長），門井麿（？），宮内直信（宮内工務所代表），大塚泰助（鞍山殖産興業会社社長），池尻半太郎（遊楽館店主）⁽³⁾。
- 8月24日 市外，特に鉄西で騒動（Y）⁽⁴⁾。ソ連軍司令部（昭和製鋼所迎賓館），食糧と女子5名の供出を命令（I H）。cf. この頃，鞍山の日本人市民は胸に赤い布を着け，同色のバッジや旗を用意してソ連軍の進駐に備えていた（満洲製鉄鉄友会編 [1957] 160ページ）。
- 8月25日 ソ連軍，列車，ソ連，トラックで南下を開始（I H）。
- 8月28日 ヴィジレコフ中佐，タンコシクローノフ空軍少佐，昭和製鋼所へ（Y）。
- 8月30日 安田一郎，ラジオで米軍の日本進駐を聞く（Y）。
- 8月31日 カズロフ大尉，地上部隊司令官（衛戍司令官）として来鞍（Y）。
- 9月1日 カズロフ大尉，昭和製鋼所へ来る（Y）。
- 9月3日 アルダコフスキー大佐，来鞍（Y）。

- 9月4日 鉄西で中国側（国民党？），戦勝祝賀会（Y）。
- 9月5日 旅順の日本人に退去命令（Y）。
- 9月6日 製鉄専門家メロニンコール少佐，チェルシヨフ大尉他が昭和製鋼所へ。操業継続の命令（Y）。
- 9月8日 昭和製鋼所，迎賓館ならびに割烹濱の家でメロニンコール少佐，チェルシヨフ大尉の歓迎会を開催（Y）。
- 9月9日 鉄西で騒動。日本人数名，殺害される（Y）。
- 9月10日 禹周明副市長，市長に就任（Y）。
- 9月12日 今川一策元航空部隊司令官少将，ソ連へ連行（Y）。
- 9月13日 ソ連軍製鉄関係技師13名，昭和製鋼所へ。団長ドロボオリイスキー大佐（Y）。
- 9月15日 ソ連軍，第1回目の日本軍武装解除。日本人の市中警備へ配備（IH）。
- 9月16日 ソ連軍技術将校を濱の家に招待。この頃，八路軍参謀長張樞，来鞍（Y）。
- 9月18日 ボルコフ大佐，来鞍（Y）。メロニンコール命令の無効を宣言。
- 9月20日 ボルコフ大佐，岸本綾夫理事長と会見。11月25日までに設備の2/3を撤去する命令（Y）。ソ連軍，日本人維持会の解散を命令。国民党（市役所），八路軍（天佑跡），ソ連（守備隊跡）の三頭政治が始まる（IH）。
- 9月21日 昭和製鋼所に撤去本部設置。部長は矢野耕治常務（Y）。ソ連兵300名，満洲製鉄学院に迫る（Y）。cf. 1937年に昭和製鋼所によって設立された3年制の実科教習所の後身。同教習所については昭和製鋼所〔1940〕を参照（355ページ）。
- 9月22日 ソ連兵15名，大孤山の警備に行く（Y）。

- 9月23日 改めて日本人僑民会を元青年学校跡（富士見通り）に設立（IH）。会長矢野耕治（製鋼所常務理事），副会長石川義助（石川医院院長），岩満三七男（前市長），委員鈴木兼介（製鋼所監事），上田利三郎（陸軍大佐），朝慶一郎（元警務科長），大塚泰助（鞍山殖産興業会社社長），池尻半太郎（遊楽館店主）（IH）。
- 9月24日 ソ連兵25名，弓長嶺に進駐（Y）。
- 9月25日 ソ連兵300名，満洲製鉄学院に入る。この頃，八路軍崔司令官，来鞍（Y）。製鋼所の解体作業が始まる（IH）。今川航空隊司令官，李（承鋌？）鞍山市長，ソ連軍に連行されて行方不明（IH）。
- 9月28日 ソ連兵300名，満洲製鉄学院を去る（Y）。
- 9月29日 清風荘，久米宅，井幡宅をソ連軍将校宿舎に提供。ラジオ供出命令（Y）。
- 9月30日 時計を中国標準時に変更（Y）。日満軍の残存兵，ソ連軍によってすべて武装解除。八路軍の大部隊，市内へ進駐（IH）。国民党系于市長，解任。李政治部員，市長代行。警察署長に八路軍系李（承鋌？），就任（IH）。
- 10月2日 撤去作業の促進を命じられる（Y）。
- 10月4日 昭和製鉄所社員，勤務時間を延長される（Y）。
- 10月5日 八路軍崔司令，ソ連より解散を命じられる。鉄西方面で若干の市街戦。鄧国慶大佐，登場（Y）。
- 10月7日 撤去作業に市民を動員。台町社宅を次々に提供（Y）。
- 10月10日 八路軍系叢振東市長，就任。李（承鋌？）政治委員副市長へ就任（IH）。この頃，国共の内戦が激化（IH）。
- 10月12日 橘寮にソ連兵150名入る（Y）。
- 10月13日 ソ連軍大将，来鞍。日本人には会わず（Y）。

10月14日 夜、雑品倉庫火災（Y）。日系治安維持会、解散される（Y）。

東北政務委員会委員長熊式輝、新京に入る（Y）。

10月15日 陳阻賽、副市長となる。

10月16日 弓長嶺の社員および家族800名、無事に鞍山へ戻る（Y）。

10月17日 日本人僑民会、発会式。会長矢野耕治（Y）。

10月18日 右側通行制が施行される（Y）。

10月19日 八路軍、募集辦事処を開く。任一男、処長に就任（Y）。

10月20日 再び左側通行制へ（Y）。八路軍、日本人に対して100万円の供出を要求。僑民会会長石川義助が手渡す（I H）。肩書きは臨時のもの？あるいは池尻の記憶違いか？）。

10月21日 崔司令官、鞍山保安総隊司令官となる。鄧国慶大佐等、鞍山を撤退（Y）。叢鞍山市長、2万円を持って消える。崔司令官、市長を兼任（I H）。

10月22日 セット等の供出、連日に及ぶ。日本軍傷兵400人、旅順より来鞍（Y）。

10月23日 「欽西若干不安」（Y）。

10月25日 僑民会内に保衛班（班長池尻半太郎友楽館経営者、委員浅井）を設置（I H）。

10月26日 桜桃園に引き揚げ命令。カズロフ大尉、新司令官ザブラドヌイ少佐を紹介（Y）。

10月27日 迎賓館で新司令官を歓迎（Y）。

10月28日 禹周明市長辞職、叢振東新市長に就任（Y）。

10月29日 カズロフ大尉、離鞍。ソ連軍大将視察。日系には会わず（Y）。

10月30日 日本軍、完全に武装解除される（Y）。

10月31日 ソ連への供出相次ぐ（Y）。

- 11月1日 高碇達之助総裁，飛行機でソ連軍将校と来社。ソ連側の接収に調印（Y）。八路軍，国民党関係者を厳しく捜査（IH）。この頃，ソ連軍司令部からの物資供出命令（家具，衣服，褐色布地等），ますます強まる。拒否者は投獄（IH）。
- 11月2日 新衛戍司令官，モーゲル少佐と交代（Y）。
- 11月3日 軍人および青年の集会が禁止される。被投獄者100余名（IH）。
- 11月4日 撤去作業終了の予定（Y）。
- 11月5日 撤去貨物，最後の発送（Y）。作業従事の日本兵，直ちに列車でソ連へ連行（IH）。5名のソ連兵，ライフルを発砲して日本人住宅9カ所を襲う。4日目にソ連軍司令部より軍隊が出動（IH）。
- 11月6日 撤去団将校40数名，大連に去る（Y）。
- 11月7日 ソ連軍革命記念日の祝賀会（Y）。
- 11月8日 （ソ連軍？），東北人民自治軍（八路軍）を武装解除（Y）。
- 11月9日 ソ連軍，撤去作業を終了し，将校が続々離鞍。東北人民自治軍，昭和製鋼所の警備に就く。誠之館，略奪される（Y）。
- 11月10日 満洲製鉄学院に人民自治軍400名を収容（Y）。
- 11月11日 鉄西方面および苗圃，略奪される（Y）。
- 11月12日 鉄西八番町方面はじめ全市に不安（Y）。
- 11月13日 日本兵5,000人，シベリアへ送られる。脱走兵多数，ソ連軍求追。守備隊家屋，全焼。銃声多し（Y）。cf. 長大区長を務めていた中山智の回顧によれば，鞍山守備隊の兵力は敗戦時に約8千名で，この内2千名がこの時脱走したという

(満洲製鉄鉄友会編 [1957] 166ページ)。

- 11月14日 ソ連軍、昭和製鋼所の倉庫貯蔵品を盛んに積み出す。八路軍、しばしば進駐し、移動 (Y)。
- 11月15日 迎賓館の家具類をソ連軍に供出 (Y)。
- 11月16日 理事長室その他の家具をソ連軍に供出 (Y)。
- 11月17日 市内に不安。正門に接待班をおき、応接に努む (Y)。
- 11月18日 戻入品倉庫、火災 (Y)。
- 11月19日 満洲製鉄学院、卒業式。全市で家宅捜査始まる。ソ連軍への供出続く (Y)。
- 11月21日 ソ連軍、夜に本館へ来て発砲し、現金を強要 (Y)。
- 11月22日 八路軍、2,400円紛失事件で午前中に本館を捜索 (Y)。八路軍、矢野耕治僑民会会長を連行。市長 (李?) 命令で岩満三七男元鞍山市行政処長が会長、朝慶一郎元警務科長が副会長、鈴木謙則元満洲製鉄監事が事務局長、池尻半太郎友楽館 (映画館) 主人が保衛班長、大塚泰助鞍山殖産興業会社社長が民政班長、石川義助石川医院院長が衛生班長に就任 (IH)。
- 11月23日 脱走日本兵、清風荘 (任一男辦事処長、李政治委員宿舎) を襲撃。小池元二課長、在室し、引致される。南部倉庫、火災 (Y)。
- 11月24日 台町の警戒嚴重。疎開の日本人11軒、上台町に入る (Y)。
- 11月25日 清風荘、二度目の掠奪 (Y)。
- 11月26日 昭和製鋼所分館に新編第1団 (王) 入る (Y)。
- 11月27日 大孤山で脱走日本人 (日本兵?) が討伐される。本館、捜索を受ける。西一幸 (特別服務) 部長、工人糾察隊に連行される (Y)。
- 11月28日 七嶺子方面で日本軍が討伐される。西部長、帰る。岸本綾

夫理事長，辦事処に出頭を求められ，そのまま帰らず（Y）。

- 11月29日 敗残日本兵，市内に入る（Y）。
- 11月30日 ソ連軍司令官，昭和製鋼所へ来て会社復興の話。日本兵の
穩便取扱について話し合い成る（Y）。八路軍司令部，日本人
有力者に200万円の供出金を要求（IH）。
- 12月1日 岸本理事長宅，搜索。船田，今津秘書，女中2名，連行さ
れる。ソ連軍，5日までに工場清掃の命令。小池課長，帰
る（Y）。
- 12月2日 七嶺子社宅の惨事判明。矢野常務宅で緊急会議。ソ連軍駐
屯司令官ミハイエル少佐夫妻，来鞍（Y）。僑民会，製鋼所
消費組合跡へ移転（IH）。
- 12月3日 大宮校，中学校，正門，分館の八路軍，移動。七嶺子社員
の救助方を誓願中，矢野常務，古賀総務部長が金師長に留
置される（Y）。
- 12月4日 日本軍討伐戦捷慶祝大会。公安局，火災。岸本理事長の女
中，帰る（Y）。
- 12月5日 ソ連軍の命令により本館を清掃。岸本綾夫，矢野両氏の罪
状が公表される。市内治安，好転（Y）。国民党員と称する
3名，僑民会に運動費5万円を要求するが，疑ってこれを
拒絶（IH）。
- 12月6日 僑民会改組。会長岩満三七男，副会長朝慶一郎，事務長鈴
木兼則（Y）。
- 12月7日 遼陽に連行された七嶺子社員，徒歩にて帰る。ユリ大佐，
ボルコフ大佐，昭和製鋼所へ（Y）。
- 12月8日 七嶺子の社員，電車で帰る。七嶺子問題一段落（Y）。cf.
いわゆる「七嶺子事件」とは，中央軍の到来を錯覚した脱

走日本兵による八路軍に対しての武装蜂起とその鎮圧活動の巻き添えで発生した日本人住民の被害を指す（満洲製鉄鉄友会編〔1957〕55—6ページ参照）。

- 12月9日 八路軍，慰靈祭（Y）。
- 12月10日 安田一郎，岸本綾夫理事長に面会・差し入れのため，陳阻賽市長に会い，釈放を懇請（Y）。朝鮮義勇軍と称する50余名，市倶楽部（富士見通4丁目）を占拠。
- 12月12日 市政府にて製鉄所復興会議。ミハエル少佐，李政治委員，陳舜臣市長（復興顧問禹周明）（Y）。
- 12月13日 安田，佟秘書長を通じて岸本理事長に差し入れ（Y）。
- 12月16日 11月1日～16日（撤去期間）最後の給料支払い。理事長釈放問題に新甫，平尾（康雄？＝鞍山商工公会常務理事？）の両名登場（Y）。
- 12月19日 社名は暫定的に（鞍山）鋼鉄所となる（Y）。
- 12月20日 構内神社，心霊還幸式（Y）。国民軍司令部，武器，電話，ラジオの供出を命令（IH）。
- 12月21日 市政府，石炭を接收。この日より暖房停止（Y）。
- 12月22日 長大区一帯に朝鮮義勇軍と称する30数名が現れ，全戸家宅捜査。坂本少佐他将校2名を逮捕。将校の引き渡しを要求して全住民を零下12度の戸外に立たせる。僑民会の朝，池尻両名が交渉し，5時間後の午後3時半に屋内に戻る（IH）。
- 12月23日 ソ連軍司令官ミハエル，誕生日。
- 12月25日 ミハエル司令官，離鞍。後任，来たらず（Y）。ミッチェルと称する上級下士官，各所の民家に押して金品を強奪（IH）。
- 12月26日 岸本理事長，矢野常務等，本溪湖に送られる（Y）。

- 12月27日 理事長問題で桜井（英大），通訳に呼ばれる（Y）。
- 12月28日 国民党員と称する者，僑民会に10万円を要求。この頃，八路軍，国民党と称しての金品の要求が随所で行われる（IH）。
- 12月31日 理事長問題で李政治委員に陳情（Y）。
- 1946年 1月4日 昭和製鋼所，部長会議（Y）。
- 1月5日 坂本少佐等，朝鮮義勇軍に拉致される（Y）。
- 1月8日 僑民会議員に立候補盛ん（Y）。
- 1月10日 僑民会議員選挙（Y）。
- 1月11日 八路軍，移動頻繁。医師看護婦徴用の件。
- 1月15日 舟田，今津秘書，帰る。国民党中央軍の一部，奉天に入る（Y）。
- 1月17日 矢野，古賀，小林等，近江屋ホテルに移送。昭和製鋼所の新理事長に禹周明が就任。夜間，強盗多し（Y）。
- 1月21日 課長以上，会社集合（Y）。
- 1月26日 僑民会事務局長鈴木兼介，阿部常就と交代（Y）。
- 1月28日 昭和製鋼所の管理をソ連軍から八路軍に移すため，主任以上が集合（Y）。
- 1月30日 製鋼所接收座談会。座談会前にソ連軍から「中国側には接收させず」の言明あり。日本側は困惑（Y）。
- 1月31日 ソ連軍，八路軍に昭和製鋼所からの退去を要求。富士小学校，全焼。八路軍部隊，しばしば会社に来る。安田一郎，通化の日本人切込事件を聞く（Y）。
- 2月5日 ソ連軍幹部ガルコヒック，Director，ソリュエコフ，Chief Engineer となって会社の復興に乗り出す。阿部常就，総務部長就任。
- 2月6日 岩満僑民会会長，朝副会長，鈴木（元？）事務局長，松尾

元鞍山飛行隊長，三宅欣吾近江屋ホテル代表社員，坂本（泰通？＝坂本組社長？）等，市政府に捕わる（Y，IH）。

2月7日 僑民会，市政府に接收される（解散命令）。罪状公表（Y）。

2月8日 日本人のラジオ，電話機，全面供出命令（Y）。八路軍，僑民会の解散を命令（IH）。鈴木事務局長はこの日に収監？（IH）。

2月10日 保衛班長池尻半太郎，投獄される（IH）。

2月18日 国防色服の着用禁止（Y）。

2月20日 矢野常務宅，立退命令（Y）。

2月21－24日 安田一郎，外事課を訪問（Y）。

2月28日 小林通訳，出所（Y）。

3月2日 安田一郎，矢野夫人，古賀夫人とともに家族嘆願を始める（Y）。

3月4日 ソ連兵，昭和製鋼所から去る（Y）。

3月6日 本溪湖から日本人共産黨員和，来る（Y）。

3月8日 八路軍，鞍山日本人技術者残留団（鞍山組）約100人を安東へ移送。11月中旬に鞍山へ戻す（満洲製鉄鉄友会 [1957] 92－94ページ，満蒙同胞援護会編 [1962] 709ページ）。

3月9日 安田一郎，和に嘆願（Y）。

3月11日 矢野夫人，古賀夫人，市長に嘆願。夕刻，矢野，古賀の両名が釈放される（Y）。

3月12日 小林，発疹チブスで死去（Y）。

3月13日 東北銀行より昭和製鋼所に借越金整理命令。部長1,000円，課長500円を抛出。台町，頻々と荒らされる（Y）。

3月15日 中央軍南下。渾河発電所の破壊のために水道が断水（Y）。

- 3月16日 東北券（八路軍券）出る。旧券との交換は2：1（Y）。
- 3月18日 八路軍，しだいに撤退（Y）。
- 3月19日 収監者多数が釈放される（IH）。
- 3月20日 岩満，朝，師橋，坂本の4名，処刑される（Y）。池尻，死刑執行の直前に脱獄（IH）。
- 3月22—23日 国民党，八路軍の前哨戦（IH）。
- 3月23日 電灯が全て停止。松島，千歳区，暴民に荒らされる（Y）。
- 3月24日 国共の内戦が激化（IH）。
- 3月25日 自警組織の確立が計られる（Y）。
- 3月28日 国民党中央軍，しだいに南下（Y）。
- 3月30頃 八路軍の撤退に際し，日本人数が射殺される。三宅欣吾，奇跡的に処刑場から逃れる。鈴木兼則，行方不明。天野堅次郎（賢二郎？，満蒙同胞援護会編〔1962〕882ページ参照），阿部常就，連行される（Y）。cf. 聞人会編〔1969〕144ページ以下。
- 4月1日 市内西方および北方に砲声盛ん。本館焼失。国民党軍，市役所に軍司令部を設置（IH）。
- 4月2日 中央軍，市中に入る。銃声盛ん。八路軍，撤退（Y）。
- 4月3日 市内平静。中央軍兵士，市内に入る（Y）。
- 4月4日 八路時代の区名を全て復旧・改称（Y）。
- 4月5日 電灯復旧（Y）。
- 4月6日 新居留民会（鞍山市日僑善後連絡総所）が発足。主任（会長）石川義助，副主任小野平八郎（Y）。副主任は藤沼禧一郎（富士建設監査役，小麦粉配給組合理事長），隅野光世（満洲製鉄社員），平尾康雄（鞍山商工会常務理事）であったとする回顧もある（聞人会編〔1969〕126—7，137ページ）。

- 4月10日 市内の治安，良好。人心，安定す（Y）。
- 4月12日 昭和製鋼所に対して3日間の会社清掃命令（Y）。
- 4月13日 再び停電。八路軍に対する戸口調査，嚴重（Y）。
- 4月14日 鉄道，奉天より復旧するが，再び爆破される（Y）。
- 4月16日 国民党会社接收委員唐之肅他20数名，昭和製鋼所に来る（Y）。
- 4月17日 接收委員，工場を視察（Y）。
- 4月18日 社名を鋼鐵廠とする（Y）。
- 4月21日 各区名を改名（Y）。
- 4月26日 大和区の中国青年殺害事件，重大化（Y）。
- 4月30日 全市民，首実検のため外出禁止（行われず）（Y）。
- 5月3日 戸口調査，終了（Y）。
- 5月8日 水道復旧。55日目（Y）。
- 5月10日 再び断水（Y）。
- 5月14日 安田一郎，ニュースで奉天日僑俘虜監理所が出した対日遣送の命令を聞き，在鞍日本人の遣送開始も近いと喜ぶ（Y）。
- 5月19日 鞍山市日僑俘管理処（国府機関）開設される。居留民会は解消し，同機関の連絡所（処）となる（Y）。
- 5月22日 八路軍，市内に突入し市街戦となる（I H）。
- 5月24日 東方連山に銃砲声。市中の交通禁止される。
- 5月25日 市街戦。中央軍の飛行機が参加するも，八路軍は市中に入る（Y）。
- 5月26日 各種の使役多し（Y）。
- 5月28日 八路軍，馬車数十台で市内の軍需品を運びだし，市民代表23名を憲兵詰所跡に拘禁して，軍資金200万円を要求。前後三日間で調達（I H）。

- 5月29日 八路軍，市内の有力者に献金を命令（Y）。
- 5月30日 研究所，焼ける。八路軍，溶鉱炉に発破をしかける（Y）。
- 5月31日 銃砲声。中央軍，再び市内に入る。近江屋ホテル，電電，焼ける（Y）。
- 6月3日 市内に築壘盛ん（Y）。午後3時，国民党軍，鞍山を再制圧。市庁舎に司令部を設置（IH）。
- 6月4日 国民政府接收委員，昭和製鋼所に帰来（Y）。
- 6月5日 国民軍，日本人の本国帰還事務について通達を出し，石川義助を事務管轄の代表者に任命（IH）。
- 6月10日 日僑善後連絡所（ママ）に遣送事務組が設置される（福永組長）。安田一郎，瀋陽辦事処長に就任（Y）。
- 6月11日 ポーレー対日賠償委員一行，来鞍。
- 6月12—14日 奉天行の許可証，発行されず（Y）。
- 6月15日 日俘引揚列車，突然来る（Y）。
- 6月16日 安田一郎，日俘引揚の第一列車に乗って奉天へ（Y）。
- 6月19日 奉天日管副所長劉少将，上田大佐と同乗で帰鞍（Y）。
- 6月20日 奉天より王少将，来鞍（Y）。
- 6月24日 安田一郎，劉少将と同行して奉天へ（Y）。
- 6月30日 王武蔵大尉と帰鞍（Y）。
- 7月6日 安田一郎，三度，奉天へ（Y）。
- 7月10日 鞍山市民，遣送第一列車を送る。以後，7月28日まで1日1列車，3千人宛の遣送が続く（Y）。
- 7月16日 第2回送還列車（無蓋貨車10両），出発。約2千名（IH）。
- 7月17日 送還列車，錦州に着く。倉庫に一週間待機し，葫蘆島に回送（IH）。
- 7月20日 安田一郎，帰鞍（Y）。

- 7月22日 安田一郎，出発（Y）。
- 10月7日 留用者最後の遣送隊，鞍山を出発（満洲製鉄鉄友会編 [1957] 87ページ）。cf. 遣送された日本人は総計61,012名，うち59,512名が一般人，1,500名が元軍人であった（満洲製鉄鉄友会編 [1957] 81ページ，満蒙同胞援護会編 [1962] 614ページ）。

参 考 文 献

- 鞍山商工公會 [1944 a]. 『鞍山商工要覧 康德10年10月』 康德11年1月。
- [1944 b]. 『康德10年度 鞍山商工公會業務報告書』 鞍山商工公會，康德11年12月。
- cf. この資料は，井村哲郎氏が鞍山市档案馆で収集したものである。資料利用についての井村氏の度々のご厚意に，深く感謝します。
- 聞人会編 [1969]. 『鞍山回想録 石川義助先生を憶う』 鞍山会。
- 解学詩・張克良編 [1984]. 『鞍鋼史（1909～1948年）』 冶金工業出版社，北京。
- 劉景玉・智喜君主編 [1994]. 『鞍山城市史』 社会科学文献出版社。
- 満蒙同胞会編 [1962]. 『満蒙終戦史』 河出書房新社。
- 満洲重工業開発会社 [1939] 『満蒙亜在満関係会社事業概要』 康德6年4月。
- 満洲製鉄鉄友会編 [1957]. 『鉄都鞍山の回顧』，満洲製鉄鉄友会。
- 松本俊郎 [1995 abc]. 「1940年代後半の昭和製鋼所の操業状態(I)(II)(III)」 (『岡山大学経済学会雑誌』第26巻第3・4号，第27巻第1号，第3号)。
- [1995 d]. 「資料紹介：瀬尾メモランダムについて」 (『岡山大学経済学会雑誌』第27巻第2号)。
- Matsumoto [1996]. Continuity and Change of the Iron and Steel Industry in China——the Case of the Northeast District in the late 1940S—— (『経済研究』 Vol. 47, No. 2, Apr. 1996)。
- 満蒙同胞会編 [1962]. 『満蒙終戦史』 河出書房新社。
- 内閣総理大臣官房調査室監修 [1956 ab]. 『中共鉄鋼業調査報告書』 企業編，企業編別冊，中共鉄鋼業調査報告書刊行会。
- 友清高志 [1987]. 『満洲慟哭』 講談社。
- [1992]. 『鞍山昭和製鋼所——満洲製鉄株式会社の興亡』 徳間書店。

注記

- (1) この時点では治安維持会はすでに僑民会に移行しており、会長職は上田利三郎から石川義助に移っていたが、ここでは満蒙同胞援護会編〔1962〕の記述に従っておく（311—2ページ）。
- (2) 役職、肩書きについては、鞍山商工公會〔1944a〕（78, 84, 129—30ページ）、同会〔1944b〕（7—33ページ）に依っている。
池尻「鞍山日記」に記載された役員は年表中の18名であったが（17ページ）、友清〔1992〕によれば治安維持会の役員は下線を付した11名に浜田幸一（料亭浜の屋主人）、菅田菊一（菅田工務店経営）の兩名を加えた合計13名であったという（269—70ページ）。
ちなみに浜田幸一（三業組合長、鞍山商工公會〔1944b〕23ページ）、菅田菊一（菅田組代表、鞍山商工公會〔1944a〕130ページ）については別職を記載した資料があり、それぞれ兼職の可能性が考えられる。友清〔1987, 92〕に記述された大塚泰助の正ちゃん堂、池尻半太郎の遊楽館については（〔1987〕201, 211ページ, 〔1992〕269ページ）、上記の鞍山商工公会の資料から確認することができなかった。
なお、以下においても「鞍山日記」、「安田一郎日記抜粋」中に所属についての説明がない者については、関連文献を参考にしてこれを補足した。
- (3) 日本降伏の事実、ラジオ放送によって8月15日には鞍山市民に伝わった。石川義助の回想によれば「あの日は鞍山は大変いい天気、お昼にラジオを聞くように云われていましたが、町の大部分の人々は塹壕掘りに出掛け」ていたという（満洲製鉄鉄友会編〔1957〕158ページ）。
- (4) 鉄西区は、日本人街に隣接していた八卦溝の中国人部落を治安、風紀上の観点から移転させるために建設された中国人街であった。八卦溝全部落の移転は「満洲国」の「建国」と同時に決定され、建設は1935年頃から始まったという。「一部部落民の強い反対を押し切って断固強行された」という部落移転の経緯と中国人が集住していたという二つの事情が、鉄西区の騒動の背景にあった（満洲製鉄鉄友会編〔1957〕139—142ページ、劉景玉・智喜君主編〔1994〕137ページ）。

The Diaries of the Deserted Japanese Settlers in Anshan

Toshiro Matsumoto

In this paper I introduce two diaries written by the Japanese settlers who were forsaken in Anshan, Liaoning province, by the Guandong Army in 1945. I also present a chronological table about Anshan during the civil war between the Nationalist and the Communist, cross checking these diaries with the other historical materials.

The abandoned settlers spent hard and horrible days in the period. Some of them were forced to help the reconstruction of Anshan Iron and Steel Company. So their diaries give us the valuable information to comprehend the situation of Anshan and A.I.S.C.

One of the diaries was written by an ex-clerk of Showa Iron and Steel Works(later A.I.S.C.). It tells us the daily incidents around his life. Another diary teaches us the political and economic circumstances in Anshan. The author of the latter had been one of the leaders of the Japanese Settlement Corporation at Anshan and was arrested once by the Eight Root Army. He described his unusual experience vividly in the diary.